

平成26年度一般教育部サバティカル成果報告会

日時：平成27年3月16日（月）

午後4時30分～午後5時30分

場所：相模原キャンパス L1号館 4階 42講義室

1. ご挨拶 一般教育部長 藤原 俊朗

2. サバティカル成果報告会(報告20分・質疑応答10分)

I. 野村 廣之 人間科学教育センター 人文社会科学 教授

(平成26年1月1日～3月31日)

「心的体験の記録 フランツ・カフカの『日記』第1冊・第2冊について」

私は基本的にフランツ・カフカ(1883-1924)の日記を翻訳しました。カフカはかなりの分量の日記を書き残していますが、1910年5月から1911年10月24日の分まで、全体の5分の1ほど(日記帳全12冊のうち第1冊と第2冊)を翻訳しました。これは単にテキストを翻訳しただけではなく、出来る限り詳細な注釈を施したものです。翻訳の課程においてあらためて明らかになったのは、カフカの日記の特異な性格です。カフカの日記記述は、日常生活の単なる記録ではなく、心的体験の記録とでも言うべきものです。

II. 坂田 剛 自然科学教育センター 生物学 講師

(平成26年2月18日～8月17日)

「植物の光合成を促進する未知の仕組み」

植物は光合成によって有機物を合成します。この有機物は地球上のほぼ全ての生き物の活動の源で、その元々の素材は大気中の二酸化炭素(CO₂)です。大気中のCO₂は気孔と呼ばれる小さな穴を通過して葉の中に入り、さらに葉内の細胞表面で水へと溶け込んで、光合成に用いられます。近年、私たちの研究グループは、石灰化の起こる海洋生物において、その体内に高濃度に存在するポリアミンと呼ばれる低分子化合物が、大気中のCO₂を水中へと濃縮し、石灰化を促進する現象を見いだしました。ポリアミンはすべての生物の体内に含まれるので、ポリアミンは植物においてもCO₂の濃縮に働いて、光合成を促進する役割を果たしているのかもしれない。私はそれを検証するため、サバティカル制度を利用し、東京大学 大学院理学系研究科 生物科学専攻 植物生態学研究室および京都大学 生態学研究センターとの共同研究を新たに開始しました。その結果、ポリアミンが光合成に寄与し、植物の生活に役立っていることを強く示唆するデータが得られつつあります。本報告会では、これまでまったく予想されてこなかった、ポリアミンによる光合成促進について、現在までの研究経過を報告いたします。なお、本研究は海洋生命科学部資源化学研究室との共同研究の一部です。

主催：北里大学一般教育部

共催：北里大学一般教育部研究委員会

連絡先：一般教育部 研究委員長 浜崎

(hamazaki@kitasato-u.ac.jp)